



監修 〓 桑田忠親 / 村上元三 / 尾崎秀樹

山岡莊八全集 45

明治天皇  
(一)

山岡莊八全集 45

明治天皇(一)

著者 山岡莊八

装幀 加山又造／蟹江征治

発行者 加藤勝久

発行所 株式会社 講談社

東京都文京区音羽二―一二―一二  
電話 東京(〇三)九四五―一二―一二(大代表)  
振替 東京八一三九三〇

印刷所 凸版印刷株式会社  
製本所 大製株式会社  
製函所 株式会社岡山紙器所

第一刷発行 昭和五十九年十月二十六日

定価 一六八〇円

©一九八四 藤野稚子 ISBN4-06-129299-4 (〇)(文芸)  
落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛にお送り  
ください。送料小社負担にてお取替えます。

目次

図説・明治天皇（カラー）

御降誕の巻

五

碧血怒濤の巻

二四七

卷末特集

日本剣客列伝〈9〉 男谷信友 津本 陽

二七七

別刷 タイム・トラベルの楽しみ〈45〉 宮脇俊三

插  
繪  
  
三  
井  
永  
一

明治天皇  
(一)

御降誕の巻  
碧血怒濤の巻



御降誕の巻





蓮月不在

ふとしたことから、ゆくりなくも忘れかけていた大事なことを思い出し、思い出すとこんどは自分自身のうかつさに、心の底からびっくりしてゆく場合がある。

その日の一座の空気にそれがあつた。いや、一座というより、やはり屋越しの蓮月尼がびっくりしたと言つた方がよいかもしれない。

綽名ななのとおり、もうこの頃は蓮月尼の引越しは、そのこだわりのない和歌や、手びねりのきびしよと共に都中で評判たがだつた。この尼の正確な年齢は誰も知らない。父の太田垣光古たがきが、知恩院山内の真葛庵まがくわで七十八歳で往生をとげたとき、彼女は「厄年です」と言つたそう。

それで人々は三十三歳だろうと想像したのだが、それは女性の厄年では無くて、男の厄年の四十二歳だつたのを、尼の身の戯あそびれに告げた年であつたとも言われている。

それからすでに十年もの歳月が経ち、今は嘉永三（一八五〇）年になっている。それなのに、依然としてこの尼の麗質は衰えず、浮かれ男につけねらわれては転々と居を変えている……今日も尼は清水坂へ生業なりわざの手びねりを売りに来て、通りかかった清水寺の月照げつしょうにそれをこぼしたのであつた。

月照は、弟の信海と成就院の正慎のほかに、いかつい侍を四人連れていた。

一人は水戸の家来で鵜飼うかいにながしと言ひ、一人は薩摩出身の目下部伊三治めくさべいさぢ。あとの二人は尼も顔見知りの三条家の丹羽豊前守にわぶねぶねと、鷹司家の三国大学とであつた。

「ご精が出ますなあ」

これも整いすぎた顔だちの、まだ若い月照に声をかけられ、蓮月尼はすぐさま、どこかによい転居先はないものであろうかと訊ねていった。

「聖護院の近くの今の住居に盗賊が入りました。その噂がひろまって、また居耐えぬことになつたのでございます」  
尼がそう訴えると、月照は、すでにその噂も耳にしていたらしい。心当りがなくもないゆえ、成就院へ来て、みなのために茶を汲んでくれまいかというのであつた。

尼はよろこんでその言葉に従った。もう今日は、手びねりのきびしょと釘書きの和歌をきざんだ蓮月好みの茶碗を三つまで売っている。糊口の料が手に入れば、それ以上の慾は持たない尼であった。

尼は、戸板の店を素早くたたむと、売れ残りの焼物と一緒にそれをみやげ屋庄兵衛の物置にあずけ、六人のあとに続いて、仁王門から西門の石段をいそいそとのぼっていった。

すでに陽射しは真夏に近い。重なりあった両側の緑の底で、滝の音がかすかに耳をうって来る。時刻はかれこれ八ツ近かった。

「尼どのは、盗賊に麦こがしを三椀ご馳走なされたそう  
な」

とつぜん日下部という侍が話しかけた。するとそれを待っていたように、

「宿かさぬ人のつらさを情けにて、朧月夜の花の下ぶし  
……」

三国大学が、笑いながら尼の歌を口にして、

「そうした心境の尼どのにあの噂ではむごすぎる」  
と、同情しているような面白がっているような口調で言  
い添えた。

蓮月尼はまっ赤になった。

噂の盗賊というのは、まだ屈強な壮年の大男で、わざわ

ざ身の上はたずねなかったが、餓えているのがよくわかった。わかると捨てておけない尼は、あり合う到来ものの麦こがしを、手ずから掻いて恵んだのである。

「——米があつたら炊いでやつたろうに」

そう言うと、盗賊は、眼を赤くして三椀喰べ、それからすでに包んであった盗品の包みをそつと尼の方へ押し返した。

尼は受取らなかつた。もともと大した品などあろう筈はない。

「——こなたのお役に立てば尼が使うも同じこと。遠慮のうお持ちなさい」

盗賊は、しばらく考えている様子だったが、そのまま包みを背負って闇の中へ消え去った。

それだけで済めばよかったのだが、この盗賊は、尼の庵を出て、五、六丁ほど離れた蹴上げへ出る道すじで吐血して死んでいたのだ……

翌朝早くそれを見つけた百姓が、

「——背中の大風呂敷に蓮月というお前さまの名書がありました。ご縁故の方でござりましょう」

わざわざ知らせて呉れたことから騒ぎになった。

盗賊は言うまでもなく麦こがしの毒死であった。

検死の役人はかくべつ尼を疑いはしなかったが、これだけの事件が市井の人々の噂にならない筈はなく、それも

もっぱら人並みすぐれた尼の容姿や残りの色香と結びつけられた。中には盗賊が、実は尼のかくし男ではなかったのかというものから、そうではない、尼の見捨てた男が怨みをこめて贈った麦こがしであったろうと言う者まで、さまざまな想像が、好奇心の波に乗ってみだれ飛んだ。

いや、それだけではない。尼に好意を寄せる人々までが、悪い噂を打消してやりたいとわざわざ真相を訊きにやってくる。

尼は到頭悲鳴をあげて庵を逃げだした。それ迄のように入口に「蓮月留守——」の札をさげて、手びねりの焼物に没頭することなど、思いも奇らなくなってしまった……

むろんその妻こがしの寄進者は尼にはよくわかっていた。しかしそれを口にするには尼にとって耐えられない。というのそれが、尼の風流な手すきびに、同好者としてしげしげ庵をおとずれる、さる大店のあるじの囲い者で、つい二年前までは三本木の売れッ妓だった娘のような女性なのだ……

そうした意味では、尼の美貌と年齢を忘れた若きとは、言いようもない罪障の深さを思い知らせるものであった……

### 嘆きの黒髪

尼は実の父母の名を知らない。

もの心ついた時には、知恩院の寺侍太田垣光古夫婦に溺愛されている養女であった。

「——こなたをひと眼みたときから手放せなくなったのじゃ。あまりに愛くるしゅうてなあ」

養父の光古は、養女であることをかくそうとはしなかったが、実の父母の名は決して告げはしなかった。尼の心の動揺をおそれたらしい。それでも、ポツポツ聞き出したところによると、彼女は京の三本木で生れたことがわかった。

当時の三本木は、主として上流階級の人々の遊興する花柳の巷である。それだけで母という人がどのような素性の女性であったかは想像出来た。

しかしその実母は京の生れではなかったらしい。

実は実父は、伊勢の藤堂家の分家筋にあたる人で、その人が、参勤交代の江戸よりの帰路、伴なって来た愛妾を事情あって三本木に残してゆき、その胎から生れたのが尼であった……と、聞かされたのは、名を誠と言った尼が、二

度目の婿養子、重二郎との間に離縁話の持ちあがっているときであった。

とにかく尼のお誠は太田垣家で育てられ、何も知らずに九歳のとき丹波亀山五万石の松平家に望まれて御殿奉公にあげられた。

太田垣家へは、彼女には兄にあたる一人息子の賢古があった。おそらく両親はこの賢古とお誠をゆくゆくは夫婦にして……と、考えていたのに違いない。

ところがお誠の十三歳のときに養母が歿し、それから七十余日目に続いて賢古もまた亡くなってしまったのだ。

それから養父のお誠に対する愛情は偏りすぎた溺愛に変わっていった。世間ではそれもこれも、あまりお誠が美貌で惻発に過ぎたからだだと噂していたが、彼女が十七歳で御殿勤めの暇をとって戻って来ると、その年迎えた婿養子は、到頭養父と折合わず、足掛け八年目に一男二女をあげていながら離縁となり、離縁になると間もなくぼっくり死んでしまった。

最初の婿は但馬城崎の岡氏の末子天造で、婿に入ると同時に直市と称していたのだが、養父の光古に言わせると、直市は、お誠の良人に価しない放蕩懶惰な無能な男であった。

「——あのような男に、お誠を添わせておいてよいものではない」

ところがその直市が離縁になって亡くなると間もなく続いて、彼の残していった一男二女とも、言い合したように癩瘡に罹って次々に夭折していった。

養父の光古はあわてて第二の婿を探しだした。

そして彦根藩士風見平馬の弟重二郎を迎えたのだが、これも養父の気にはいらなかった。良人と養父の不和が、どのように彼女の心を苦しめたかは、その重二郎を離別すると同時に、彼女がみどりの黒髪を剃りこぼち、蓮月尼になっってしまったことで想像出来よう。

蓮月尼として、世のつねの女性なのだ。平凡な夫婦の暮らしの中に、女性のしあわせを望んでいたのは言うまでもない。

後には、一夜の宿を追われて花の下に野宿しながら、

宿かさぬ人のつらさを情けにて

朧月夜の花の下ぶし

宿をことわられたお蔭で、このような風流な一夜を迎え得たと、行雲流水をたのしむ境地に到達している尼にも、若いおりには次のような和歌に心をやったこともあった。

わが知らぬせ、が衣のほころびは

引きけむ人ぞ縫ふべかりける

しかし、養父のかたよった愛情は、そうした娘の心のすさびを許そうとしなかった。

それかあらぬか世間では、光古は、父としての感情を超えた思慕を燃やしだしている。そのため誰もこの類くない麗人に近づけまいとして眼を光らしている……そんな噂さえ立ちだして、現に、二度目の婿の重二郎も、それを半ば疑いだしているふしがあった。

むろんそのようなことで、お誠は養父を責めはしなかったが、お誠が黒髪をおろしてゆくと光古も続いて出家して西心と号した。

或いは出家した娘と共に住みたい希いが、養父の心の底にかくされていたのかも知れない。

とにかく尼にとっては愛されることが欲びであると同時に一つの重い罪業でもあった。養父の西心を見送った後、ずっとその受難は続き、到頭「屋越しの蓮月」という綽名をたてまつられるようになっていた。

そこへ今度の盗賊の毒死事件である。尼が都の名物になってしまっているだけに、引越す先も狹められて困っている。それに手すさびの焼物の窯が欲しいという条件も重なり合っていた。

しかし、そうした身まわりの雑事に追われ続けていた尼も、月照たちの後から成就院の客殿に入ってゆき、みんな

の話の聞くともしなしに聞いているうちに、思わずドキリと胸を刺されるものがあった。

### 新しき帝

話は主として禁裏とその周囲のことであった。まだ御即位して四年あまりにしかならない今上の帝（孝明天皇）が殊のほか英明であらせられ、ご踐祚と同時に幕府へご勅諭を下された……そんな話までは尼はさして気にもとめなかった。

尼だとして全く世間の風の届かぬ煩いの中に没頭しきっているわけではない。近ごろしきりに日本の近海に出没する夷人船のことも耳にしていたし、そのため日本中が妙に癩立って来ていることも皮膚でわかった。

しかし、客の中の三國大学が、尼の眼にはおかしいほどの昂ぶり方で、

「もはや日本も君臣の義を明らかにして、姿勢を正さなければ滅亡のほかはない。それを案じて若いお上はご奮起なされた」

頬をまっ赤にして朗々とそのご勅諭を暗誦したときには、思わず茶碗を取りおとしそうになっていた。

尼は三國大学の人柄を以前からあまり好きではなかつた。いつも静かに頷いている月照のみやびた姿がそばにあるせい、芝居の中に出て来る赤面じみた彼の声と仕ぐさは、よけいに荒磯のすきんだ漁夫を想わせた。

その大学が、

「——近年異國の船時々出没する趣きを聞き召さる。然りといえども、文道はよく治まり、武事は全く整い、特に海防は堅固なる旨をかねがねきこし召さるるにより、叡慮を安く思召さるるも、近ごろ外船渡來の風聞しきりに行なわれ、彼是軫念遊ばさる。よって猶この上とも武門の面々は洋蛮の小寇を侮らず、大賊をおそれず、宜しく籌策を立て、神州の瑕瑾とならぬよう、充分指揮につとめて、弥々宸襟を安んじ奉るべし……」

のり、とでも奏上するような口調で高々と勅諭を暗誦し、「このご勅諭の意味するものはなんであるか。これこそ歴史のゆがみを正さんとする、大号令の第一発目でなくてはなんであろうぞ」

あたりを睥睨しながらさびた声で言いきったときには、一座へはふしぎな硬ばりが見てとれた。

殊更に国学者じみた説明を聞くまでもなく、この国のあるじは決して將軍家ではないと都の人々は信じている。しかし、その禁裏のありようが、果してそれにふさわしいものであったかどうかを反省することは忘れかけている。

そのわが国ぶりを忘却している者どもへのこれは一大警告なのだ。大学は言い添えた。

「考えてもご覧なされ。今から二百数十年前、禁裏では一切の大権を徳川政府にお委任なされ、いまだかつて一度でもお口出しなされたことがあったであらうか。ついぞそのようなことはなかつた。しかしその慣わしが到頭ここで破られたのだ。文辞は懇切をきわめてあらうとも、もう任せてはおかぬぞというお上のご決意は歴然たるものがある。それを天下の赤子は何と見るか」

そう言つて、三國大学はチラッと水戸藩の鵜飼なにがしの顔いろをうかがつた。

鵜飼なにがしは月代のあとのはげあがつている重厚そうな領き方で月照を見やり、丹羽豊前を見やつた。

「その儀について存じよりを……実は先程奉誦なされたご勅諭を下さる三月前、メリケン国の使節として、ピッドルと申す海軍の代將が、軍艦二隻をひきつれて浦賀へ強談に参つてござる。以前から攘夷の必要を説きつづけて参つた当藩では、早速これは日本国の浮沈にかかわる大事なりとして、攘夷をなし得る大筒の数を調べるよう幕府に進言致しました。すると何と！ お役に立つ一貫匁以上の砲は、観音崎の台場に六門、城ガ島に二門、走水の十石崎に二門、同旗山に六門、猿島に一門、大津陣屋に二門の合計十九門のみ……人数だけは五千以上をあわてて狩りあつめ、





ではこのままはお……お……納まりませぬ。必ずそのうちに禁裏と江戸の争いに相成りましょう」

「ならいでか。国の難儀を忘れ果てて眠り続ける徳川家に、若い帝は堪忍袋の緒を切つてしまわれたのだ」

大学はまた煽るように言つてチラと鵜飼にながしの顔いろをうかがつた。

熱心に攘夷を唱えている水戸は徳川家の親藩、徳川家を罵りながら、大学は水戸の機嫌を損じまいとしているらしい。

「何よりも、わが国柄を忘却し、長い間大政を幕府に聳断させてあつたが誤りでありましょう」

日下部の言うあとから鵜飼はさすがにムツとしたようすで、

「徳川家にも勤皇はござる。この儀はお忘れないように」  
生まじめに言つてから、言葉の強さを笑いにまぎらした。

月照が静かに口を開いて、

「とにかく、ご英明な若いお上を、この騒動にまきこみ申してはおそれ多い。ここではみんなで幕府の眼を一時も早よう困難に向け変えさせざるが肝要でありますよう」

やわからかく話題の方向を変えさせたのはその時だった。

### 受難の禁裏

侍たちが成就院を辞去していったのはそろそろ足許の昏くなりかけた頃であつた。

蓮月尼があとに残つて庫裡へ立ち、片付けものをして戻つて来ると、客殿には灯りが入り、月照一人が深沈とした表情で何か考え込んでいた。

「なるほど、これは三百年來の騒ぎの火蓋であつたやも知れぬ」

月照は誰にともなく呟いて、薄暮の庭に向つたため息した。蓮月尼は、もうそれを聞き洩らせなかつた。

さっきの話で、十九門と八十門などと言われた大砲の数字のひらきと、今上の帝のご勅諭の意味するものが、忘れては済まないことであつたと胸を噛みだしているからだった。

人生と自然のあらゆる面を眼をとどこかせ、ひとかど悟りすましたつもりで尼であつたが、夷人船の出没が、禁裏と幕府の争いになりそうなところまで尖鋭化して来ていることなど思つてもみなかつた。

しかしそれはそうなる可能性をたぶんにくんでいる。